

言語文化 評価問題 (案)

次の文章は、数学者でエッセイストでもある藤原正彦と、画家で絵本作家でもある安野光雅との対談からの抜粋である。これを読み、後の問いに答えよ。

藤原 日本人は素数が好きなんです。五七五とか五七七七七とか。五も七も素数だし、五七五を足すと十七、これも素数です。三三七拍子も足すと十三と、みんな素数。日本人はなぜか素数が好きなんです。不思議に思います。日本人にはこのリズムが合う。例えば、俳句はなぜ五七五なのか。和歌はなぜ五七五七七か。どちらも定説というものはないようです。音楽的に四拍子だからという人もいます。「古池や蛙とびこむ水の音」では、以下で一字を八分音符とすれば、

① ② ③ ④ ① ② ③ ④ ① ② ③ ④
フルイケヤ○○○○、カワズ○○トビコム、ミズノオート○○○○、

と考えると、四拍子になります。私はちよつと違う考え方もできるのではないかと思っています。字数が五から八くらいまでの言葉は、日本語の場合は二群に分かれる。例えば、古池十や、蛙十とびこむ、水の十音、と二群に分かれます。五とか七などの奇数を二群に分けると、必ずそれらは、偶数と奇数になります。

ところが、もし俳句が六八六だったら、様相が異なります。足して六とか八などの偶数になるのは、奇数足す奇数あるいは偶数足す偶数です。そうすると偶偶偶偶とか奇奇奇奇とかの配列が生まれ、躍動感のあるリズムにならない。奇数と偶数という異質なものの組み合わせが、凹凸を作り、抑揚のない日本語にアクセントを加えている。これが私の仮説なんです。

安野 日本語のリズムは知らぬ間に身についているらしくて、奇数偶数の関係までは考えませんでした。※1啖呵売といいますが、あれは短歌売だったのかもしれないですね。寅さんじゃないけれど、「信州信濃の新そばよりも、あたしゃあなたのそばがいい、お前百までわしゃ九十九まで、ともにシラミのたかるまで」などとやるこれも七五調ですね。「旅行けば駿河の国に茶の香り」などの※2浪花節なんぞもそうですが、自然と日本語のリズムになっていて、そうでないものを作ろうと思っても無理ですね。

藤原 万葉集には※3防人の歌や※4東歌など、庶民の歌が山ほどあります。四千五百のうちの半数以上が庶民の歌で、作者不詳はほとんど庶民の歌。

あの頃は、五七七七のようなリズムで、日本人が話していたようですね。恋の告白も、歌でないとかダメだったらしい。これなら庶民も本気になります。万葉集が完成したのは奈良時代ですが、奈良時代の百年以上前の歌もあります。エリート、貴族、僧侶以外はほとんど字が書けなかったから作者不詳の中には、字を書けない民もかなりいたのではないのでしょうか。他国にこんな例を聞いたことはありません。驚異的な現象ではないでしょうか。

(中略)

安野 明治の頃の新聞の文章はほとんど七五調でしたが、小説にも七五調で文章を整えている例がありました。その頃の新聞は、大人が声を出して読んでいました。

しかし、声に出すのが一種の習慣になって、音読にしないと読解できなくなる人もあるので、多少注意が必要です。

そこへくると、私は外国の詩はわかりません。第一読めないのです、言ってみてもはじまらないのですが、あれは調子というより、言葉の韻がかもしたリズムがあるように思います。どうですか。藤原 その通りです。行末に同じ音を置くことでリズムがでます。例えば、red, head, dead, tread など文末に配します。欧米人は好むようですが、私には「無理しているなあ」とか、「駄洒落っぽい」と思えることもあります。リズムは確かに出るのですが。

安野 ※5上田敏の『海潮音』は、完全に創作と言ったほうがいいのではないかと思います。

井伏鱒二は『厄除け詩集』に、于武陵の詩「勸酒」の「花発多風雨 人生足別離」を「ハナニアラシノタトヘモアルゾ、サヨナラダケガ人生ダ」と訳して人々をうならせましたが、あれは、本当に見事ですね。

(「世にも美しい日本語入門」)

(語注)

※1 啖呵売(たんかばい) ……ごく平凡な品物を巧みな話術と独自の口上で客を楽しませることで売る商売手法。

※2 浪花節(なにわぶし) ……三味線を伴奏として演ずる、多くは義理人情をテーマとした大衆的な語り物。浪曲。

※3 防人(さきもり)の歌…大化の改新後、九州沿岸の警備にあてられた兵士の詠んだ歌。離れた家族を思う歌が多い。

※4 東歌(あずまうた) ……東国地方の歌。庶民の生活や身近な自然などが詠まれており、方言も多く用いられている。

※5 上田敏(うへだびん)の『海潮音(かいちょうおん)』…一九〇五年に出版された訳詩集。

勸酒 于武陵 うぶりよう

勸君金屈卮 君に勧む 金屈卮
 滿酌不須辞 満酌 辞するを須みず
 花發多風雨 花發 風雨多く
 人生足別離 人生 別離足る

『唐詩選』

一般的な訳

あなたに勧めよう この金の杯を
 杯になみなみと注がれた酒を遠慮する
 必要はない
 花が咲くと雨や風にさらされて散って
 しまうことが多いように
 人生も別ればかりが多いものだ

井伏鱒二の訳

コノサカツキヲ受ケテクレ
 ドウゾナミナミツガシテオクレ
 ハナニアラシノタトヘモアルゾ
 「サヨナラ」ダケガ人生ダ

『厄除け詩集』

問1 資料IIは、資料Iの漢詩を日本語訳したものである。二つの訳を比較し、井伏鱒二の訳にはどのような特徴があるか。対談の内容をふまえて十五字以内で答えよ。

☆解答例・・・七五調のリズムで作られている。(十五字)

問2 傍線部「あれは、本当に見事ですすね。」とあるが、どのように言えるのはなぜだと考えられるか。対談中の藤原正彦氏の言葉を用いて七十字以内で説明せよ。

☆解答例・・・七五調は五音や七音を二群に分けたときの奇数と偶数という異質なものの組み合わせが、凹凸を作り、抑揚のない日本語にアクセントを加えているから。(六十九字)

【参考】

第2 言語文化 B 読むこと

(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

- ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確にとらえること。
- イ 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。
- ウ **文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。**
- エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。
- オ 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

(2) (1) に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

- ア 我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論、随筆などを読み、我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。
- イ 作品の内容や形式について、批評したり討論したりする活動。
- ウ **異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動。**
- エ 和歌や俳句などを読み、書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり、テーマを立ててまとめたりする活動。
- オ 古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材、内容、表現の技法などについて調べ、その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。